昭和51年3月9日第三種郵便物認可　平成14年2月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.363

2002 FEBRUARY

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

2002年ＨＡＪサマー・キャンプ隊員募集

桑頂抗沙峰（6,590ｍ）

チベットのラサから北北東（直線距離で約135km）に美しい山容の山があります。周囲の山々を睥睨するかのように峻立するその姿は、白い雲にまとわれて見る者は息をのまざるを得ません。

この山は1992年日本隊によって初登頂されていますが、その後登山隊の消息はありません。

そこを舞台にサマー・キャンプを実施します。

記

1．期　　間:2002年７月20日～８月16日(28日間)
2．募集人員:10名程度
3．負担金:70万円
4．〆切り:定員になり次第
5．資格:冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人

ニンチン・カンサ(7,206ｍ)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。ＨＡＪは既に３回登頂に成功しています。ルートは1998年にＨＡＪ隊が初登攀した西稜を予定しています。

記

1．期間：2002年７月20日～８月25日（37日間）
2．募集人員：10名程度
3．負担金：85万円
4．資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5．〆切り：定員になり次第
6．その他：ＨＡＪの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。

（最終案内です）

表紙写真

ヤンラ・カンリ主峰北面は、美しいヒマラヤ襞（ヒダ）に守られた三角錐の頂上が遥か遠くにひっそりとたたずんでいる。下から見るとその下の北壁が圧倒的な存在感があるためか、ラマの部落の人達は北壁を構成する「岩壁」に名前をつけているらしい。Ｃ２から　　（写真：田村正勝、文：山森欣一）

ヒマラヤ No.363

1．ＰＥＯＰＬＥ
2．ヤンラ・カンリ北面に挑む
22．ヒマラヤ・ニュース〈トピックス・Books・ヒマラヤから〉
23．2002年ＨＡＪ登山隊隊員募集
24．寸感・事務局日誌

PEOPLE

Lhaba　（ラバ）

2001年ＨＡＪヤンラ・カンリ登山隊の連絡官を勤めたラバとは、1987年日中友好ラプチェ・カン合同登山隊の時以来の再会である。

空港での再会では、山森隊長は彼の発音が西蔵なまりで自分の名前を言ったので、聞き取れずであったが、迎えの車の中でラプチェ・カンのサミッターと言われて、ラバと判明した。私は野球帽をかぶった彼の輪郭を思い出し、迎えの車に乗る前にラプチェ・カンのサミッターかと質問したところイエスとの返事であったのでラバと判明した。

ラプチェ・カンの報告書の隊員紹介でそれまでの山歴以外に「甘いマスクは日本でも、もてそう」と書かれてある。

ラプチェ・カン登山隊の時、彼は23歳で西蔵登山隊側の中で２番目に若い隊員であった、今回も隊員より10歳位い若く、コックよりも年下である。

ラプチェ・カンの時はアルコールは何でも飲んでいたが、再会した日の夕食でアルコールを勧めたら、アルコールは体に悪いから止めたとのことであったが、数日後ビールは止めたが、ビール以外のアルコールは止めていないことが判明した。

白酒と地元の酒である、チャンとアラは大好きであり、ＢＣで昼過ぎから夜の10時過ぎまで飲んで、翌朝二日酔いで起きてこないことがあった。

日本酒も好きで、日本酒を奨めると飲む。

たばこの喫煙数は多く、山森隊長に体に良くないから止めろと注意されていた。

蔵族特有の陽気さは飲酒のあるなしに関係なく陽気であり、ＢＣでの夕食の調理時はコックの助手を勤めていた。

連絡官の職務を勧めるのは今回が初めての為、コックの手配、ポーターの手配や辺防隊に対する手続き等の渉外活動に時間を要したが今後経験を積めば、良い連絡官になると思う。

7000ｍ以上の登頂記録はヒマラヤ349号に記載されているが、それ以外にもハイポーター等の登山現場スタッフとして活躍しているが、今回は雪が降る前のＣ１に一度来ただけで、ＢＣで連絡官の仕事に専念していた。

家族の写真は見せてはくれなかったが、ラサに20代の奥さんと２歳の子供がおり、将来子供は日本の大学に留学させるのが夢とのこと。

（記：森山安次）

1985　チョー・オユー（8,021ｍ）7,200ｍまで
1986　チャンツェ（7,543ｍ）登頂（長野県山協）
1987　ラプチェ・カン（7,367ｍ）登頂（ＨＡＪ）
1988　サガルマータ（8,848ｍ）（三国合同）
1989　シシャパンマＣ（8,008ｍ）（愛知学院大）
1991　ナムチャ・バルワ（7,782ｍ）（ＪＡＣ）
1992　　〃
1993　チョモランマ（8,848ｍ）登頂（台湾）
1995　チョモランマ連絡官助手
1996　チョモラーリ（7,326ｍ）（長野）
1997　チョム・カンリ（7,048ｍ）登頂（韓国）
1999　ザルセル・カンリ（6,　　ｍ）登頂（長野山協）

南木林県出身。1964年８月５日生れ。18歳でチベット登山隊に入る。妻（洛曲28歳）と２歳の息子がいる。

（1987年ラプチェ・カン隊当時の評）

1985年チョー・オユーで7,200ｍまで。1986年日中合同でチョンツェに登頂。甘いマスクは日本でももてそう。足早く、今回の隊の中でも強さは一、二を争うと見られる。後半風邪をひき不調だったようだ。1988年三国チョモランマに参加する。

A Quest of Nnknown Route

ヤンラ・カンリ北面に挑む
（ガネッシュ・ヒマール主峰）

ＨＡＪ登山隊2001年

■　はじめに

ネパールと中国の国境近くにあるガネッシュ・ヒマールは、日本隊の記録も多く、また、カトマンズの空港からもよく見えることもあって日本人にとっては馴染みの山群である。ネパール側からは良く知られた山群であるが、1980年以前にネパールと中国の国境策定協議の結果、Ｉ峰南面のチリメ・コーラ右岸に国境線が引かれた。また、この時の協議によって、主峰であるＩ峰の名称は、両国共ヤンラ・カンリとなったのである。

ヤンラ・カンリ峰は、この山群の主峰である。この山は、当時ヨーロッパ・アルプスやヒマラヤで活躍していた、スイスのレイモン・ランベールとフランスの女流登山家クロード・コーガンら３人によってネパール側の南面から55年春に初登頂されたが、その後45年間、頂は踏まれないまま静かに眠っているのである。

また、この山の東麓にあるジーロン鎮は、スキーの名手でありアイガー北壁の初登攀者としても知られるドイツのハインリヒ・ハラー達が、ナンガ・パルバット登山終了後、第二次世界大戦の勃発によって捕虜となりながらも、収容所を脱走してチベットのラサへ逃亡の途上、越冬した場所として有名であった。

山群の主峰であること、山姿が立派であること、登場するヒマラヤニスト達の彩り。中国側である北面に関する資料が無いこと、即ち未知の要素が濃いこと。87年に実施したチベットとの合同ラプチェ・カン（7367ｍ）登山の隊長であった成天亮氏から、合同登山の誘いがあった時、私は、躊躇せずにこの山に向かうことにした。

未踏ではなくとも40数年の登山の空白と未知のルートからの挑戦は、私達の心を高揚させるに充分であった。

しかし、96年秋に行った偵察の結果（詳細については「ヒマラヤ306号」参照）合同登山の目標はクーラ・カンリ山群で実施された。

この偵察行には思わぬ副産物があった。それは途上にあるマ・ラ（5,234ｍ）からのヒマラヤの眺望であった。この結果素晴らしい山「カバン6,717ｍ」を知り、この山の偵察を行ったのは98年秋であったが、合わせて96年に断念したヤンラ・カンリ北面の偵察も実施した。（詳細については「ヒマラヤ326号」参照）

ヤンラ・カンリ北面偵察の結果、一条の素晴らしい登路が浮かんで来た。そこからの登頂を夢見て９名が結集した。残念ながら出発前になり１名が体調不良で隊を離れたものの、残る８名は一直線に国境に突き上げる雪の稜を目指したのである。

以下はその奮闘記である。自画自賛するつもりはないが、平均年齢54歳のチームが高所ポーターを使用せずにここまで到達できたのは「健闘」と言えるのではないだろうか。　（記：山森欣一）

記

１．隊の名称

日本ヒマラヤ協会、ヤンラ・カンリ登山隊2001年（HAJ Yangra Kangri EXPEDITION 2001）

２．派遣母体

日本ヒマラヤ協会

３．目標の山

中華人民共和国、西蔵自治区吉隆県

（ヤンラ・カンリ央然岗日 7,429ｍ）

４．目　的

ヤンラ・カンリ北面からの初登攀

山岳自然環境の保全（テイクイン、テイクアウト運動の実践）

日中友好親善登山交流

５．登山期間

2001年９月10日～11月８日

6．隊員名簿（年齢は出発時）

隊　長：山森　欣一（1944.2.　生）57歳

副隊長：樋上　嘉秀（1944.6.　生）57歳

登攀隊長：佐藤　英樹（1948.4.　生）53歳

隊　員：田村　正勝（1942.4.　生）59歳

隊　員：佐藤　邦彦（1943.4.1生）58歳

隊員：森山　安次（1949.12.　生）51歳

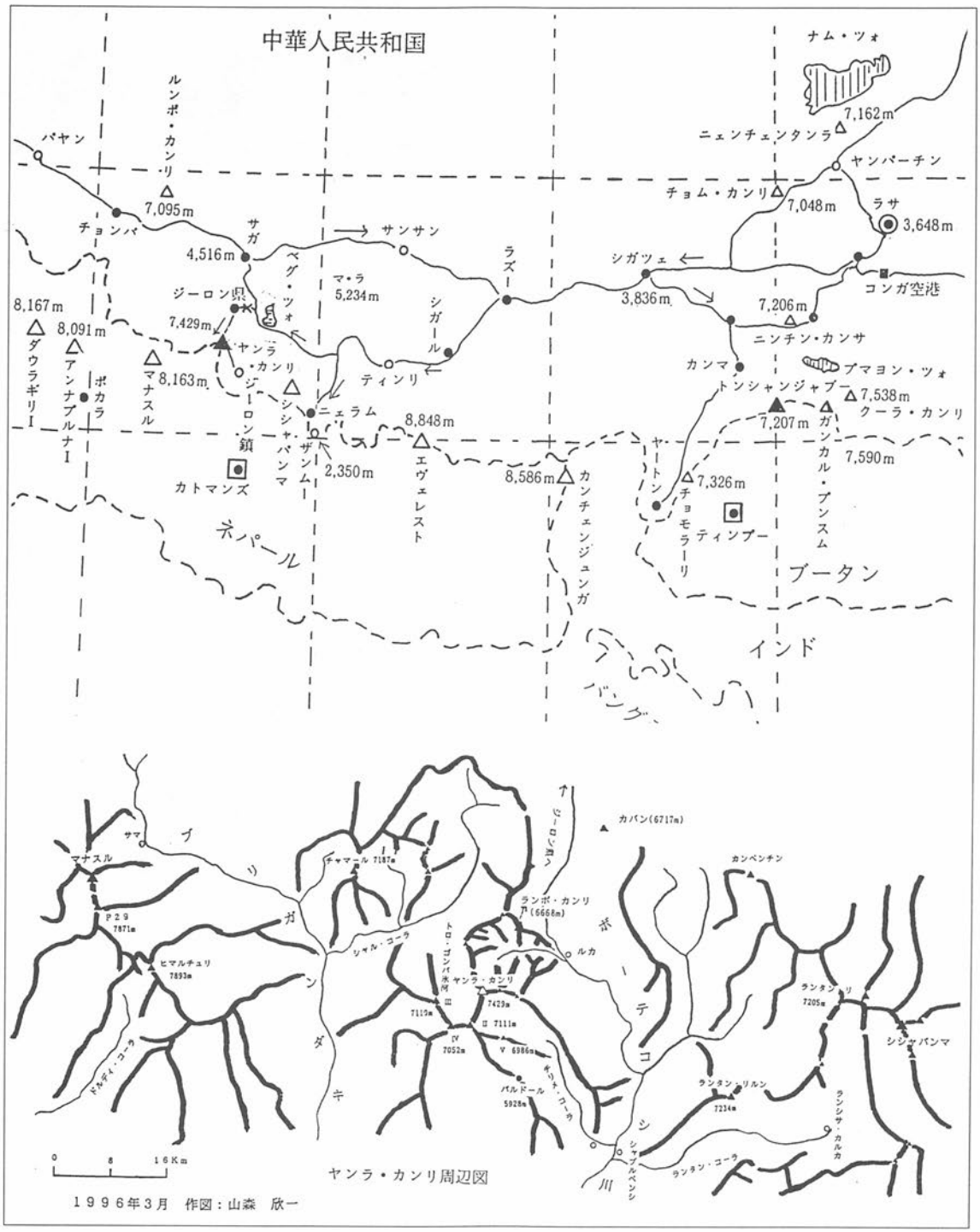
隊員：太田康夫（1953.3.　生）48歳

隊員：萬徳清孝（1954.7.　生）47歳

7．結果

1）最高到達点：東稜6900ｍ地点に10月26日到達。

2）登山にはシェルパなど高所ポーターは使用し



ていない。

3）登山概要：

9月20日～23日　登路偵察とラマプーの架橋作業。

24日　ＢＣ(3350ｍ)建設。ラマプー右岸。

29日　Ｃ１(4400ｍ)建設。ラチャンツォ(湖)

10月９日　Ｃ２(5350ｍ)建設。北東支稜左ルート上。（メガネ岩下）

18日　Ｃ３(6000ｍ)建設。北東支稜左ルート最上部。

23日　頂上アタック中止を決定。

24日　Ｃ４(6680ｍ)建設。東稜直下。

26日　東稜6900ｍに到達。(最高到達点)

11月１日　ＢＣ撤収。

ジーロン谷を目指して

〔北京組〕

9月9日　いつものことだが自宅を慌ただしく出る。池袋のヒマラヤ協会の事務所に入ると、山森隊長と森山さんが一杯やっている。さすが余裕だと感心する。今回は荷物の関係で北京組とカトマンズ組に分かれて出発することになった。カトマンズ組の３人は今日関西空港を出発。今夜は北京組の隊長、樋上副隊長、田村さん、森山さんと私の５人が事務所に集合した。

9月10日　箱崎で隊長の奥様とニンチン・カンサ隊の志村さんに見送られてリムジンバスで成田へ。北京経由の登山は初めてなので楽しみだ。中国国際航空で空路北京へ。少し揺れたが17時25分まだ明るい北京に到着した。気温27度。中国登山協会交流部・趙建軍副部長（日本語通訳兼任）の出迎えを受け、夕陽の美しい中、登山隊常宿の前門飯店に投宿。夕食後隊長の部屋で２時間ほど懇談。

9月11日　ホテルを出る前に一悶着あったが、北京をゆっくりと楽しむ間もなく成都へと移動する。２時間15分程で曇り空の成都に到着。四川省登山協会の王華山副秘書長の出迎えを受けた。空港から市内に高速道路が走っている。途中昼食を済ませてラサ大酒店に投宿した。夕食には登山協会の姜誼副主席と通訳も同席したが、あまり日本語は達者ではない。いつものように隊長の部屋で懇談。

9月12日　５時半、雨の残るラサ大酒店を出て空港へ。荷物が手違いで後の便になってしまったらしいが、隊長の話しでは10分間隔だから没関係とのこと。１時間40分のフライトで２度目のチベット入りだが全然記憶に無い。それでも、ここまでくると日本の家庭や職場のことはすっかり忘れ、頭の中は山一色である。空港には今回の連絡官であるラバ氏が出迎えに来ていた。雨の中、素晴らしい舗装道路を走り、10時半過ぎに郵電賓館に投宿。ＨＡＪの常宿の少し南らしい。

▼ニェラムの登山隊常宿「雪域旅館」

9月13日　高度障害を気にしていたが、全くと言っていいほど気にならない。富士山合宿が役に立っているのか？。ラサでは忙しい日程である。午前中（と言っても14時まで）食糧や装備の買い出し、昼食後、それらの再梱包である。17時半過ぎ終了。夕食はチベット登山協会高謀興秘書長の招宴。夕食後いつもの隊長部屋懇談だが今夜はエスケープ。

9月14日　９時過ぎに高所順応のためラサの裏山へ隊長を除く４人で出掛けた。正午に4,280ｍの頂上に到着。14時賓館に帰る。夕方、トラックに荷物を積み込む。夕食は観光用チベット料理店でたっぷりとチベット料理を味わう。その後隊長の古い友人（と言っても若い女性）が、チベットの踊りと歌の店に招待してくれた。賓館に戻ったのは23時半。チベットにこんな場所が有ることに驚いたが、もっと驚いたのは隊長にこんな綺麗な友人がいたことだ。

9月15日　ラサをランドクルーザー２台とトラック１台で出発。途中ニンチン・カンサに来た時のことを思い出しながらシガールを目指す。シガツェにはヤル・ツァンポ江沿いに走り、13時過ぎに到着し昼食。17時過ぎにラズーで給油。18時15分ジャ

ツォー・ラ（5,220m）通過。天気が良く風もない。ジープの中は陽が射し込みTシャツでも暑い。19時45分シガールのチョモランマ・ホテルに投宿。

9月16日　8時半過ぎにホテルを出て途中パスポートのチェック。チョモランマは雲の中だったがチョー・オユーが良く見えた。11時45分トン・ラを通過。12時35分ニェラムに到着し昼食のため店で待っていると、ネパール組の3人と偶然再会した。14時25分からミーティング。両方の報告の後、隊長から今後の登山隊の執行について概要が話された。再会を祝して飲み会となる。

9月17日　隊長を除く7人は4,300m付近まで高所順応活動。20時過ぎにトラックにカトマンズ経由の荷物を積み込む。

9月18日　夜半雨だったが晴れてきた。隊長はトラックの助手席に乗るため一足先に出発。残りはランドクルーザー2台でジーロンに向かう。トン・ラで隊長と合流して周囲に見える山々の名前を聞くが一度には覚え切れない。どこまでも続く草原をジープは走り、改めて中国の広さを実感させられる。ジーロンは、風が強く西部劇の世界のようだった。

9月19日　ジーロンからルカまでは、ランドクルーザーでもへこたれそうな悪路で天井に何回も頭をぶつけた。トラックに乗った隊長は大変だったようだ。途中登れそうにもない所にお寺がある。良く見ると踏み跡が付いている。このことにも驚いた。その寺にいるお坊さんも部落の人達の協力で生活しているようだ。植生と景色が日本に似てくるとルカが近くなってくる。ヤンラ・カンリ、プョンが見えるルカでは、牛や馬がのんびりと草を食べており、その真ん中にテントを張った。早速チャンやアラー売りが歓迎してくれた。

（記：萬徳清孝）

〔カトマンズ組〕

9月9日　関西空港からカトマンズへ

隊荷はネパール経由で輸送し、担当は佐藤英樹、佐藤邦彦、太田康夫の3名で関空からRA412便にて12:50離陸、上海までは約2時間。ここで1時間程休憩し再び約2時間の飛行で夕暮れの18時（ネパール時間）カトマンズ着。空港では飛田和夫氏に出迎えられお蔭でタメルのモンブランホテルまでスムーズに行くことができた。

▼コダリから友誼橋を渡って中国へ

9月10日　カトマンズ滞在

隊荷は既に別便で送ってあり通関打ち合わせにスリヤトラベル社に行く。担当は温厚そうなアンギャルツェン氏。隊荷は空港に届いており通関は何時になるか分からないし我々の立ち合いも不要とのことなので輸送の実務については何もすることがなくなった。午後は3人それぞれ思い思いに過ごす。

9月11日～13日　カトマンズ滞在

9月14日　ザンムーへ

朝5時ごろ迎えの車でホテルを出発。ギャルツェン氏の立派な自宅に保管されていた隊荷を中型バスに積み込んで6時半出発。ミンマシェルパが同行。天気が良く白い峰々が遠望され胸がときめく。途中ポーターによる輸送をし、また荷物をトラックに積み替えて12時頃コダリに到着。ここで書類不備のため荷物はストップ、我々だけ友誼橋を渡り中国（チベット）入り。CMAの方に迎えられ3時過ぎホテル到着。

9月15日　ザンムー滞在

昨日の荷物は無事ザンムー入りした。予定では北京経由の本隊とここで合流の予定だったが明日ニェラムに行きそこで合流することになった。

9月16日　ニェラムへ

5時半ホテル出発。満天の星空のもと悪路を行く。7時半、未だ薄暗い中ニェラム到着。ここで昼頃本隊と合流することができた。今日は珍しく雨が降らなかった。

9月17日　ニェラム滞在

ここは高度約3,750mで富士山とほぼ同じ。樹

木は3m位のものがポツポツ畑は殆どない。この日は順化のため裏山に4,500mまで登った。

9月18日　ジーロンへ

9時頃出発。明るくなるのは8時少し前で2時間位の時間の差を感じる。一日良い天気で高度4～5,000のなだらかなチベット高原の快適なドライブだった。シシャパンマ、カンペンチン等々すばらしい山々の眺めを堪能。15時40分ジーロン着。

9月19日　ルカへ

9:15出発。トリスリ河沿いの険しい道を南下。途中トラックが故障したが無事ルカに15:40に到着。ルカは明るい広々とした台地で飯場長屋らしきものが4棟。今日からテント暮らしでたちまち人だかりがする。南はランタン、西にヤンラ・カンリその左にプヨンの山々。

ラチャンツォ偵察行

9月20日　BC適地とポーターの荷上げ可能なルートを見出すべく、佐藤（英）さんと私（太田）はルカ（3,050m）のテン場を8時半に出発。細い木の橋でジーロン川を渡り、支流ラマプー左岸の広い平地に家屋の散在する2つの集落に通じる道を進む。

私は98年10月、カバン（6,717m）偵察終了後、樋上さんと共にラマプー流域に偵察に入っており、このあたりの様子はある程度わかっているが、その時は2日間しか無く、ラマプー右岸側には足を踏み入れていない。左岸側の低地から今回の予定ルートである東稜～北東支稜を仰いだ写真には、下の樹林の斜面の上に高台のような緩傾斜地が写っており、地図によるとその上の4,400m付近にラチャンツォ（拉張錯）という径百十数メートルの小さな湖がある。高度、地形、水が得られ上部ルートの大部分を見通せる筈であること、北西側には風をさえぎる屏風のような岩峰まであること等、地図と98年の偵察結果からは、この湖付近が最適なBC地と考えられた。問題はそこまでポーターによる荷上げが可能かどうかである。隊員が荷上げしていたら時間切れとなるだろう。地形的に高所から俯瞰しない限り見えない位置にある湖に名前が付いているのは、地元民が何らかの目的で登っているのでは？そうだとすれば、そのルートがある筈だが…。北側は樹林の急斜面、東と西は氷河

▼ツェルト泊まりでラチャンツォ偵察

に続く谷である。ラマプー左岸低地のヤブが薄く楽に歩けた経験から、北側斜面のヤブも大したことはないだろうと考え、今回そこから登ってみることにしていた。今日はツェルト1泊分の装備・食糧を背負っているが、ラマプーの徒渉と樹林帯の登行がスムーズに進めば日帰りも可能と考えていたのだが…。

集落近くの道端にいた男に挨拶し、「ラチャンツォ？」と言いながら湖の方向を指差すと、男も頷きながら同じ方向を差し示す動作をする。やはり湖を知っているようだ。いいかげんな発音の中国語で尋ねてみる。

「道はあるか？」　「ある」

「橋はあるか？」　「無い」

それ以上は会話が続かず、先に進む。

最初から連絡官に頼んで、道案内の出来る村人を探してもらうのが手っ取り早い方法だったのかもしれないが、それではおもしろくない！と考えるのは私だけか？

集落の奥に続く道を通って樹林を抜け、広い湿原にさしかかる。前回来た時より季節が早いため水が多く、長靴が泥にかなり潜る。再び樹林中の道を辿った後、適当な所からヤブをくぐってラマプーの川岸に出るが、水量が多くて徒渉出来ず、暫く上流に進む。やっと川幅が広がって渡れそうな箇所が見つかり、それでも股下まで冷たい水に漬かって何とか渡る。湖の近くに登り着くためにはもう少し下流から取り付きたいところだが、川岸はヤブがひどく移動に時間がかかりそうなので徒渉点のすぐ近くの雑草と灌木の茂った小谷を登ることになる。

13時、登行開始。傾斜は急だが、初めのうちは刈り払いをすればポーターが荷上げ出来そうに見えた。しかし登るにつれて部分的にロープをフィックスした方が良いと思われる所が出てくるようになる。やがて、このルートからの荷上げは無理という結論になり、我々も幾分か登りやすい左手の斜面に移り、更に左の尾根に活路を求める。古いナタメや焚火の跡、小動物用のくくりわな等が見つかり、このあたりも人々の行動範囲であることを知る。やがてシャクナゲ等の低木の密生帯となり、高度の影響や疲労も重なって１時間に100ｍ余りしか高度を稼げなくなる。このままでは水が得られる所に辿り着く前に暗くなるおそれもある。

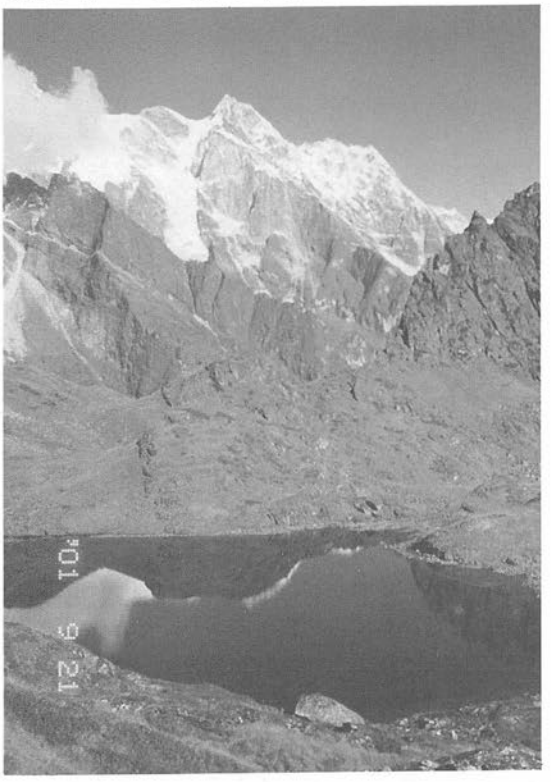
ところが、そのうちヤブの中に大石が点在するようになり、それらをつないで進むと少し行動がはかどる。灌木の背たけが低くなって抵抗が弱くなる頃、尾根の傾斜もゆるみ草地も現われる。16時頃、細い水流を発見した時は本当に嬉しかった。天気は下り坂であり、この先、岩の積み重なるモレーンのような地形となり良い泊まり場があるかどうか分からず、少し早いがここで止まることにする。念のため持って来たフィックスロープが役に立ち、ストックを利用して大岩との間にツェルトを張る。高度は4,250ｍ位。霧雨の中で食事を作るが、あまり寒くはない。

９月21日　晴天の朝を迎える。疲れも回復し、積み重なる岩を快調に登って行く。小尾根状をまわり込むと目の前に美しい光景が広がっていた。すぐそこにラチャンツォの湖面があり鏡のように背後の景色を写している。水際に降りてみると、湖岸から急に深くなっているのが分かる。生物は見当たらない。手ですくって飲みたくなる程きれいな水である。少し整地すればテントを張れる所が何箇所かあり、水音の聞こえる辺りの石を動かせば湖から流れ出す水流が出る。何よりも、上部が細かい所まで見え、下の湿原付近から見るのと較べて迫力が違う。予想を上まわるすばらしい場所である。ＢＣ予定地として申し分ない。問題は、ここまでどうやって荷上げするかである。

付近を歩いてみる。佐藤さんが目敏く杖や古いケルンを見つける。やはりここに登ってくる道があるのではないかという期待がふくらむ。ラマ氷河の谷を覗き込んでみると、上部は問題無く下れそうだがその下が確認出来ないので尾根を下ることにする。草と低い灌木が生えているだけなので歩きやすい。何箇所かに小さなカルカがあるが最近使われた様子は無く、石積みの内側にも草が茂っている。4,000ｍ付近の最後のカルカを過ぎると灌木が密生し、鋭いトゲのある木も混じって、なかなか進めなくなる。道を探してみるが見つからない。その下のシャクナゲ帯をくぐり抜けるとヤブはそれ程ひどくなくなり、灌木や笹をつかみながらかなりのスピードで下れる。笹は一様に密生しているのではなく株状にまとまって生えているのであまり障害にならない。高度が下がると直径１～２ｍの針葉樹の巨木やキノコの生えた倒木も見られる。最後のカルカから１時間程でラマプー右岸の平地に降りることが出来た。フミアトがあり、それを辿ると川岸に出た。対岸にも道のようなものが見える。ここに橋が架けてあったか、減水期の徒渉点かもしれない。

少し下流に歩いてラマ氷河の谷に入る。日帰りでこの谷に入っている樋上副隊長ら５人と合流。

▼ラチャンツォ（後方は国境の6,074ｍ）



▼ラマ・プーに架けられた橋

情報を交換し、我々２人が下降した辺りを整備してラチャンツォ付近に荷上げするのがベターという結論に達して帰途につく。　（記：太田康夫）

偵察、架橋、ＢＣ建設

20日、Ａ隊の佐藤(英)、太田は泊り込みで拉張錯方面へＢＣ、Ｃ１の偵察へ向かう。他は隊荷整理。突然公安官が現れ、連絡官が各人のパスポートとともに川下の役所へ同行。まさか歩いて帰ったわけでもあるまいが、憮然として夕方帰ってきた。太田のパスポートがないまま同行したのだが、その確認にまた出かけなければならないという。

20日、隊長除く全員でかねてより想定していた惹馬氷川ルートの偵察に向かう。吉隆蔵布を渡り惹馬普左岸の部落の間を抜け、秋色の草原から樹林と貫いて巡礼路を辿り、広い湿地帯に出て見通しを得る。湿地のぬかるみを横切って右岸に開いているラマ氷河をめざす。懸垂氷河の塊みたいな圧倒的なプヨン北面からの氷河である。深い樹林に入り、まずラマ川本流の渡渉がある。水量多く速く冷たい。渡渉点を捜し、萬徳が股間までつかってロープを渡す。藪こぎすることしばらくして水流を伴った河原に出る。氷河からの支流である。河原の上流にモレーン丘が見え、この上に出る。わりと大きなモレーン列で、一キロほど北流し、本流際に達している。通ってきた支流はモレーン列から略奪され本流右岸に廻りこんで西流し、渡渉点上流で本流と合流する。足元にはクレバスもあり、氷も見え、洞穴もある。上部はガレとむきだしの岩盤の急斜面。氷河はしばらく断ち切られていて、舌端がどこなのかも定かではない。左岸に滝が二条落ちている。

どこでもここでも氷河の衰退。足元のクレバスの氷はかつての盛期のなごりだろうか。よし春と夏の雪崩のデブリで覆われるにしても、やがてこの氷も溶けて沈み、氷河湖でも作って単なるモレーンの堆積に終わるのだろう。

Ａ隊の二人と連絡がつき、池周辺の調査を終えて同じ河原に降りてきたばかりで、こっちに向かうという。やがて合流。当初想定のＢＣ候補地は下部岩壁上の草地の台地あたりだろうが、荷上げに多少難ありそうであり、なによりも谷全域が雪崩の危険下にあって、文句なしに却下された。結局、Ａ隊の二人が降りてきた藪のなかにルートを切り開くことになる。

全員揃って支流の河原を下り、合流点からこの上流に架橋点と渡渉点を捜す。架橋点は決めたものの、午後の増水でなかなか渡渉点が見つからず、ふんぎりがつかない。遡って川幅半分以上にかかっている倒木をみつけ、佐藤リーダーがこれを使って渡り、ロープを渡す。

22日、全員で架橋に向かう。湿地帯の少し先、伐採人の踏跡を利用して決めた場所。段丘際の手頃な木を倒し、これを流れに渡すという計画。木はヒバに似た松で、華奢な鋸では樹液で渋って伐れるかどうか心配したが、直径40センチ近くの大木をあっという間に倒してしまった。あたりを払って整地し、枝をきれいに払ったものの、びくとも動かない。梢から利用長さを残して元の太い部分を切り離し、どうにか動かせた。流木を敷いて滑らし、梃で動かし、押したり引いたりの苦労の末、流れに突き出す。これとアルミ梯子を使って人が対岸に渡り、ロープで引いて基礎ができた。流木と伐採木を脇に添えてロープで結束補強し、フィックスロープを張って完了。一致団結、立派な橋ができたとみんなで喜んだ。萬徳が木の間に脛を挟んで痛めたが、たいしたことなし。橋を渡ってすぐの樹林の中にＢＣを決める。

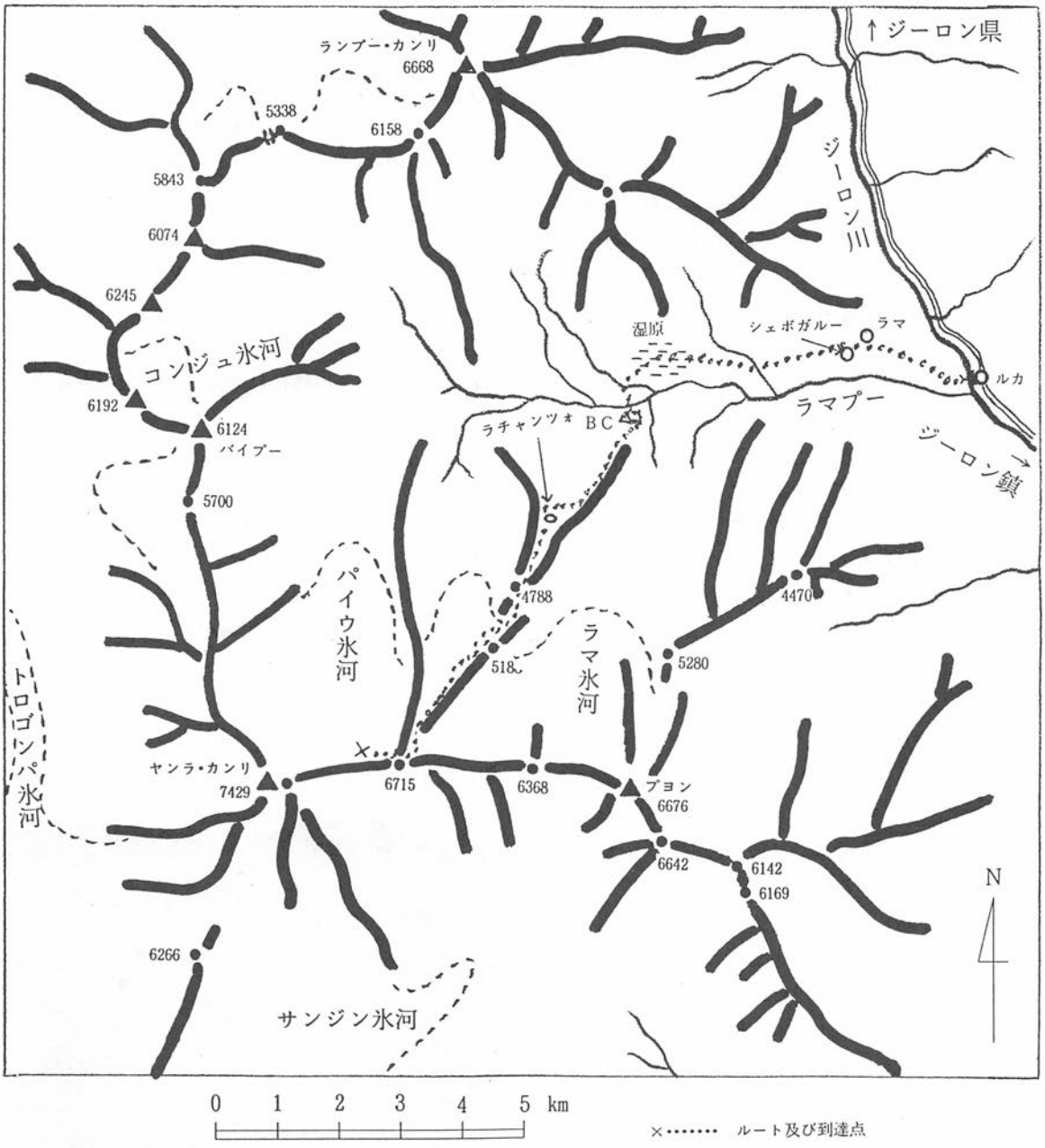
23日休養。24日、ＢＣへの移動日。朝、子供から老人まで近所の人々が集まり、48人の予定が結局51人でＢＣへ。お洒落な伐採飯場の女どもまで動員された。荷重は一人30キログラム。難所は出足のジーロン川の切れ込みの登り降りだけで、あとは楽なものである。チャンを茶がわりに呑みなが

ら、自分達の庭をがやがやと行けば3時間でＢＣ（3,350m）に到着。

途中老民工が言うには、ヤンラ・カンリをラッシアン、上部をセッケンナシンとか言うという。良い服の意だという。また頂上から右肩の急斜面の辺りを金の関連で呼ぶとは別の人の話。

直径１ｍを越す大木の樹林のもとのＢＣは樹香うるわしく、秋の木漏日がちらちらしてそれなりに趣があるものの、風がなく洗濯物が乾かないのが難。竹が豊富。竹といえば、現地の人が言うには、この森にはレッサーパンダがいて、その内蔵は旨いという。無事ＢＣ開きを祝う。

さて翌朝橋を見ると、流失防止用のロープが外され、なくなっていた。季節がらこれ以上の増水はないとの判断があったのだろう。ＰＰロープはどこでも人気がある。後日撤収時、フィックスロー



プまでみごとに外されていた。早業である。

（記：田村正勝）

より充実した登山を求めて

登攀はＡ隊（主にルート開拓を担当）の佐藤登攀隊長、太田、萬徳両隊員と、Ｂ隊（主に隊荷荷上げを担当）の樋上副隊長、田村、佐藤、森山３隊員の２つのチーム分けによって進められた。これは包囲法の常道手法であるが、高所ポーターを使用しない今回の登山では、隊員各人にかかる負担は大変なものであり、特に本登山隊は年令層が高いので直更のことであるが、当人達はそれを理解し、納得して参加している。地形的にはラチャンツォがＢＣであるが、ポーターのための荷上げ路の整備が遅れたため樹林帯にＢＣを置かざるを得なかった。このため、ＢＣ建設後、荷上路を整備して延べ25名のポーターで500kgの荷をキャンプ１に荷上げした。報告はＡ隊佐藤登攀隊長、Ｂ隊樋上副隊長が記述した。　（記：山森欣一）

ラチャツォにＣ１を建設

９月25日　曇り一時雨。佐藤・田村・太田・萬徳でＢＣからＣ１予定地の湖、ラチャンツォまでの荷上げのルート作りに出かける。残りの隊員はＢＣで、荷上げ用に隊荷を20kgにするための隊荷整理をする。前日のＢＣ入りの際、手鋸が１本盗まれたので、鋸１本・鉈１丁・はさみ１丁での仕事だ。９月20日・21日のＢＣ予定地偵察の時、太田さんと二人でもう少しラマプーの上流から枝沢を登り、湖を確認。また、使われていないカルカがいくつかあった尾根を、その際下降に使ったが、その尾根に10時過ぎに取り付く。道があるとしたらこの尾根だと思うのだが、下降の時も発見できず、今はうっそうとした急な尾根で、道がないかを探りながら、邪魔な草・枝・藪を払い、切り開いていく。所々踏み跡みたいな所があり、また古い仕掛けた罠もあるので、道はかってはあったのだろうし、村人か猟師は来ていたのだろう。罠は単純で本当にこれで小動物が捕まるのだろうかという代物だ。高度が上がり樹林帯を抜けると急に視界が開け、ヤンラ・カンリとプヨン峰全体が望まれる。今は使われていない草に覆われた最初のカルカ（4,030m）があり、これからの良い休憩場所になる。この先のカルカのある尾根を行かず右側の浅い沢を詰め、湖を目指すが、4,200mで時間切れとなり下山。19時半過ぎにＢＣに着くが、荷上げルート作りに難儀した一日となった。（Ａ）

９月26日　曇り後小雨一時みぞれ後薄曇り。

８時に起床し、９時からの朝食を済ます。10時から隊長を除く全員で、登攀隊長らが昨日切り開いた道の再整備に向かう。取り残した木の幹や枝を取り払い、不足している標識の赤布を付け足したりする作業である。ＢＣを出て暫くの平坦地を行くと山裾に突き当たると、そこから急傾斜の山腹を登るものとなる。聞いていた通り昨日までは踏跡すらも無かった様な良く茂った樹林帯の中である。一旦ほぼ水平に山腹をトラバースした後、小尾根の急登となるが、ここで登攀隊長と田村、太田の両隊員にはＢＣで別の作業が有るので引き返して貰い、昨日のメンバーでルートを知った萬徳隊員に道案内を任せる。登る程に植生は針葉樹から広葉樹へと代わり、その中に混じる竹の密生が見られなくなると枝の曲がりくねった石楠花帯が待ち受け、その枝払いや露出した根の取り除きに骨を折らされる。そしてこれを抜けて広い斜面で二人で大量に収穫して萬徳隊員がＢＣへ持ち帰る。そう言えば昨日も同じ物をキッチンテントの傍に置いて有るのを見掛けたが、それも萬徳隊員が持ち帰っていたとの事なのに今朝程は何も知らないテンジンが生ゴミを捨てる穴に放り込んでしまったのは勿体無い話。18時10分にＢＣに帰着し、装備を解いてから早速ムキタケのゴミ掃除をしてテムジンに油炒めで夕食に出す様に指示する。

この日、今日から泊まり掛けでやって来て明日から荷上げを５日間して呉れるものだと思ってい

▲ラチャンツォの荷上風景

た民工５人が姿を見せず本当に来て呉れるのかと心配だったが、翌日から５日間、違うメンバーの組み合わせで５人づつの民工が朝一番にやって来て荷上げする事になった。　（B）

９月27日、晴時々曇り。

８時半になって如卡で交渉を取り仕切っていた民工の親方が女性一人を含む若者４人を連れてやって来た。９時を少し廻ってＡ隊の佐藤登攀隊長と太田、萬徳両隊員の３人が民工と一緒にＣ１への荷上げに出発、残ったＢ隊の４人は詰め残っている共装の軽い梱包作業を終えてからフルータイム。個装を20キロ以内で民工に荷上げして貰えるとの事なので、夫々がその荷造り仕事。樋上は登山靴がザックに納まらず、長靴の方が楽なのだがＣ１へ移動の時には登山靴にする事で荷物を纏める。

（B）

メガネ岩下にＣ２を作る

27日からは隊員と、若者が主体となった５人のチベット人で５日間をかけ、Ｃ１予定地に荷上げ。彼らは水代わりにチャンを飲みながらの20kgの荷上げだが、それでも我々よりもずっと強い。中には飲み過ぎる者もいるが。最初のカルカで大休止の時、双眼鏡で珍しそうに景色を眺める様子を見ると、初めて彼らは来たのだろう。カルカから好きにルートを選ばせたら、沢からすぐ右の斜面を登り、湖に直線的なルートを選んだ。尾根・沢をトラバース気味に登り、少し起伏があるが、最短のコースだ。　（A）

９月29日、晴れ。

Ａ隊：佐藤・太田・萬徳の３人がＣ１（4,400m）に上がり、Ｃ２までのルート工作をすることになる。ラチャンツォは非常に美しい湖で、湖の辺のＣ１は、ヤンラ・カンリ、稜線続きのプヨン峰（6,676m）が目の前にあり、反対側にはランプー・カンリ峰（6,668m）、遠景はランタン山群と非常にロケーションが良く、またヤンラ・カンリのルート全体が見渡せ、非常に快適な所だ。ここは隊荷も十分荷上げできるし、ＢＣとするならば最高の環境だろうし、登山活動もしやすくなる。

（A）

10月３日、雨後曇り。

今日はＢ隊のＣ１への移動日。食後の９時、準備を済ませて小雨が降ったり止んだりする中を隊長や連絡官らに見送られてＣ１へと向かう。何時必要になるかも分からないので梯子を持って上がる事になり、田村と佐藤の両隊員が荷上げを引き受けて呉れる。個装は既に民工に荷上げして貰っているのでザックの中身はコッヘル一組、スノーバー用シュリンゲとスクリューハーケン数本に個人用の食器などと少なくて有り難い。樹林帯の登りで道を切り開いた時に切った竹を標識に使う為に森山隊員と拾って行く。

第一カルカには11時に到着。この頃になって漸く雨が止み、気分が幾分和らぐ。暫くの休息を取ってから登りを再開、13時15分にＡ隊のメンバーの出迎えを受けてＣ１に登り着く。装備を解いて３日前に張って置いたテントに入って見るが、４人では余りにも狭過ぎるので一帳り張り足して２人づつ入る事にする。田村隊員と樋上、佐藤と森山両隊員と言う組み合わせだ。テントに落ち着いた後、Ａ隊の３人が入っているテントへと出向き、隊長から指示を受けていた今後のＡ隊とＢ隊の役割分担を明確にしておく為の打ち合わせを佐藤秀樹登攀隊長と済ます。陽が落ち掛けるのを見計らって夕食を始め、暫くの雑談の後でＣ１での最初の眠りに就いた。　（B）

９月30日～10月７日　Ｃ１～Ｃ２（5,350m）間

いつも、まだ暗い６時過ぎに起き、食事の支度をし、やっと明るくなる８時過ぎの出発になる。Ｂ隊はＢＣからＣ１までの荷上げ作業なので、３人だけのＣ１生活だ。ルートは、湖を回り込みいくつかの尾根を越えて高みを目指し、氷河舌端下部の谷を注意して渡り、モレーンを登りやっとルー

▼Ｃ１とラチャンツォ

トの取り付きに付く。ここまでは始め往復5時間以上もかかり、ルート工作用のFixロープ・スノーバーをA隊の3人だけで荷上げしながらのルート工作は、決まって遅くなるとガスがかかり視界が悪くなり、雪になる。また行動を終了しC1に下るにつけ、雪は霙そして雨と変わる。濡れてC1に戻り、疲れた体で食事作り、食事が終わるとすぐ睡眠に入るが、朝方にはまた雨が降る。そしてまた似たような天気、行動のパターンが数日続くと、3人だけの生活では少々嫌気がさしたものだ。30日の最初の偵察で、我々がタワーと呼んだ岩稜の左側のモレーン帯、またタワーの稜線上を調べるが結局タワーの右側、氷河の左端にルートを取ることになる。タワーからの落石を警戒し、モレーンから氷河に上がり、ルートを延ばす。下で見るのとは違い、思った以上にクレバスが多くまた状態が悪くルートが左右に振られる。1日は易しかったので15Pと氷河上にルートは延びたが、2日は左のタワーから続く稜線に上がらなければならない。クレバスを越え、荒れて崩壊しそうな氷河の際を行き、時間切れ下降。1日、2日と天気が悪く、またC1から遠くなってきたのでルート開拓の時間が少なくなり、まだ稜線に上がれない。3日、A隊は休養日、B隊が予定通りC1に上がってくる。4日、一日中雨のためA隊は停滞休養だが、B隊は順応を兼ね氷河取り付き下モレーン上のデポ地まで荷上げ。5日、雪崩を警戒してルート開拓は止め、両隊はモレーン上のデポ地まで荷上げ。6日、前回の到達点から破っている氷壁を登るとクレバスにぶつかり右にトラバース、岩稜の際の急な雪壁を直上するが、視界がなくなりクレバスに荷をデポし下降。「今日こそC2を」と思ったが、雪で埋まったFixの掘りおこし、核心部の続き、視界不良のためルートが分からず4Pと延びなかった。それにしてもクレバスが多い。7日やっと何日振りかに天気になり、前回、荷物をデポしたクレバスから、クレバスに沿ってトラバース、クレバスの切れ目から雪崩れそうな急斜面を直上、C2予定地に着くことが出来た。(A)

核心部を越えてC3へ

10月5日、晴れたり曇ったりで夕方から霧。

昨日同様、B隊はデポ地点までの荷上げ。今日は全体で一度往復した精か今日は出足から快調。出来るだけ最短コースをとルートを色々変えながらデポ地へと向かう。特にデポ地前の氷河下のトラバースは殆ど下らないルートを選ぶ。デポ地での作業を終えて昨日よりも早く帰路に就く。ところが途中の尾根を越えて下り一辺倒になった辺りから霧が周囲を包み、全く何処にいるのか分からぬ状態に追い込まれる。困った事になったと思っている内に16時の交信時間になり、その旨を伝えようと声を出そうとした瞬間に霧が晴れ、何とすぐ下に拉張錯とテントが見えてヤレヤレと胸を撫で下ろす一幕も。そこから20分程でC1帰着の後は何時もの様に夕食を済ませ、早々に就寝と普段では考えられない規則正しさである。　(B)

▼C1上のクレバス帯を登る

10月6日、晴のち曇り。

6時の起床。今日の任務はA隊がC2建設、B隊は荷上げである。A隊が先に出発し、B隊は8時半に出発する。C1からの荷上げ品は食糧で、3度目なのでデポ地には随分早く登り着く。ここでアイゼンやハーネスなどの雪山装備に纏い変えて残置のフィックスロープを何本かザイルに詰め加え、先の者からフィックスに取り付く。しかしここからは初めてのルートなのでルート工作しながら登っていたA隊には追い付けず、到頭大きく口を開けて待ち受けるクレバスを渡り切った後で

急斜面を登り切った直後に16時になり、已むを得ずここに荷物をデポして下山とする。後で聞けばA隊はこの日もC２建設が出来ずに終わったとの事。良くなりモードだった天気が下山時に崩れ始めて再び悪化の兆しで、C１には20時過ぎに帰着する。夕食後はすぐに就寝である。　　（B）

10月７日、概ね晴。

B隊は９時過ぎからの朝食を終え、10時15分に食糧を携えて出発する。森山隊員が途中で足を痛めたとかで引き返したので、彼の担いでいた荷物の中でスノーバーだけ荷上げを引き受ける。デポ地到着は12時と昨日より更に早い。順次フィックスに取り付き、樋上は13時前から登り出す。ところが昨日の事も有るので荷物をデポ地に少し残して来たにも拘らず疲労が激しく、A隊がC２を建設し終え、そこに田村、佐藤の両隊員が登り着いたものの樋上が登っている最中に全員が降りて来たのでC２から150m程下方で断念して、そこに荷物をデポして皆と下山とした。既に16時半では致し方ない。C１には19時を少し廻って帰着。夕食後、21時半にシュラフに潜る。　　（B）

10月10日～17日　C２～C３（6,000m）間

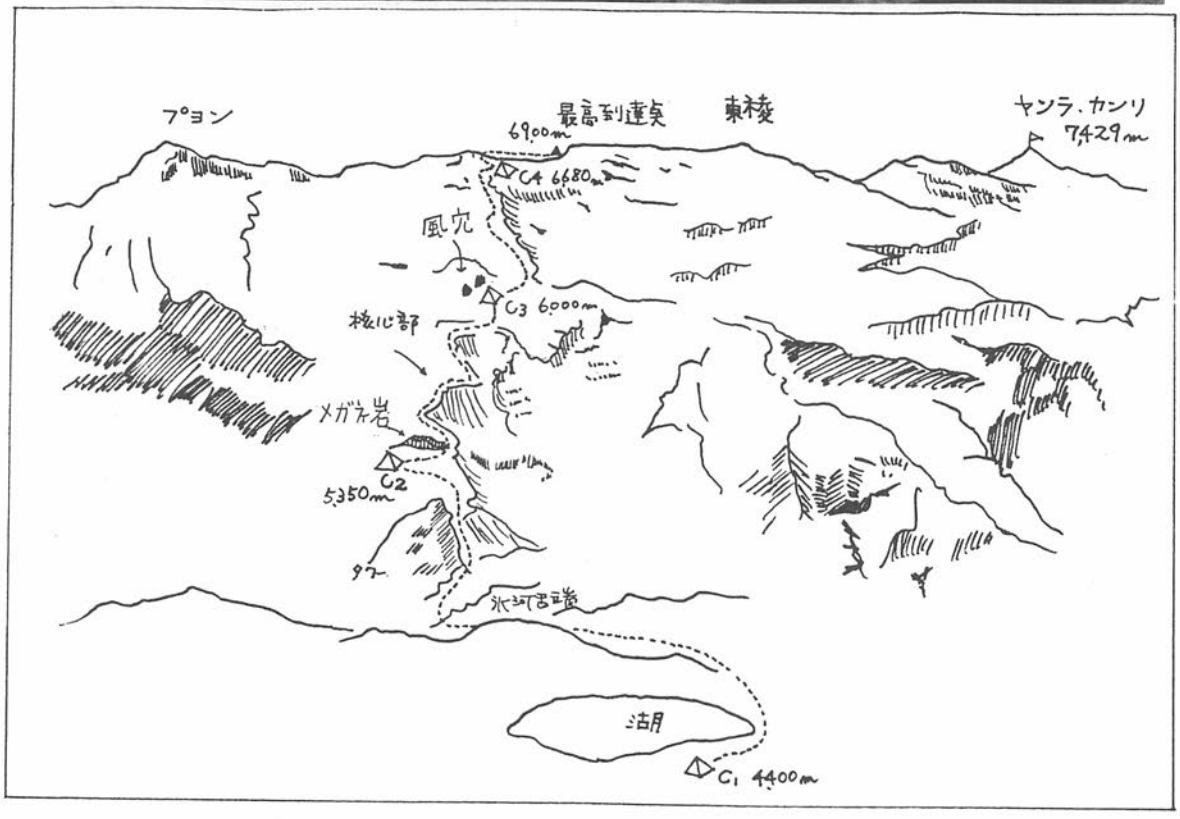
C２（5,350m）はメガネ岩右岩稜から派生する吊り尾根上にあり、上を見ても下を見ても非常にロケーションが良いところだ。ヤンラからプヨンに続く稜線・懸垂氷河からの雪崩もすぐ間近に見ることが出来るが安心な場所である。ルートはここからメガネ岩の右岩稜に取り付く。２P弱で、難しくはないが逆層の岩で、我々はロックハーケンがなかったのでスノーバーを打ち込んで支点を作り登った。岩登りは予想していなかったことである。メガネ岩が終わると雪稜になる。稜線の右側は雪庇になり落ち、左側の急斜面はプヨン側谷とメガネ岩方向に落ちている。稜線は７Pで終わりいよいよ核心部が始まる。C１からはルート全体を見渡すことができるが、C１から単眼鏡でルートを観察し、ここが一番の核心になるだろうと予想した「くびれ部分」だ。小生は、登れなかった場合を考え、真剣にその時は転進を考えたほどだ。

11日、キノコ状の崩れそうなリッジを行き（荷の重い３番手の太田さんが足を踏み抜いたので後でルートをプヨン側ルンゼに変えた）、プヨン側ルンゼのクレバスでピッチを切る。目の前の雪壁の基部まで半P、雪壁を頂上、アイススクリューを打ちながら被っている雪壁を左上し右の稜に上がり込む。雪壁は氷壁の上にさらさらの雪が被っているだけなので乗れば崩れるし、始末が悪い。雪が柔らかく非常に不安定なナイフリッジとなった稜を進みピッチを切る。稜を崩し確保支点を作るのに30分ほどもかかったが、スノーバーが効いていない。萬徳さんが上がってきて、安心できるビレー点をやっと作った。トップもしんどかったが、荷が重い太田さんもしんどかったという。時間切れのため、懸垂下降でC２に戻る。C２も朝方雪が降り、視界は悪いがだんだんと回復してくる。

▼C２にて（左・太田、右・萬徳）

12日、時間切れとなった昨日の続きだ。ルートが良く分からないが、登れるところを登るしかない。稜上を行っても行き詰まるし、かといって氷壁をトラバースしてもトップは行けるだろうが、荷上げが大変だろう。結局、稜の右側に回り込み、際を行くことにする。落ちてもいいようにアイススクリュー、スノーバーで支点の間隔を短く取っていくが効いていることを願う。15mほど稜に沿って登り、スライスパンと呼んだパンの格好をした稜にぶちあたり、しっかりとした支点を取る。スライスパンの際に沿って右上、少し溝状になっていたので助かったが、今度はスライスパンが高すぎて上がれない。下で見ていた太田さんがどうやって上がるのだろうと思ったそうだ。しかし何とかなるものだ。少しずつ稜を削り始めると、それが足下にたまりだんだんと高くなってきた。稜に上がりピッチを切る。また不安定な稜が続くので、今度は、いったん左側のルンゼに下りそしてルン

▼ヤンラ・カンリ北面東稜と北東支稜ルート



ゼを直上、大きな懸垂氷河の際でピッチを切りトラバース、右側から回り込むと、小さなプラトーが目の前に広がり一安心、核心を抜けたのだ。回り込む際、ヒドンクレバスがあるが、後日、B隊が胸まではまったそうだが幸いFixの支点の近くだったので事なきを得たようだ。プラトーもヒドンクレバスを警戒して、Fixせざるを得ない。プラトーを進み右側から来る大きなクレバスの上をトラバース、右の稜に上がると大きな沢形が広がり、先には懸垂氷河。雪崩れた痕跡があったのでいずれ雪崩れる場所だと思ったが、やはり、せっかく張ったFixが後で6Pほど流されてしまった。今度は沢を横切り、右の急な尾根を上がり、沢を右側から回り込むように稜を進み、流されたFixを張り直す。懸垂氷河にぶつかり、さらに右側の稜に上がると、小さな沢形になるが、クレバスが多く、萬徳さんがスノーバーを固定しようと、スノースコップで穴を掘ると深いクレバスが出てきた。ここのルート工作は晴れていても決まって15時前から天気が悪くなり、視界が全くなく、身動きできなくなった。休養、停滞休養と続き、17日にやっとC1から見える懸垂氷河に空いた大きな風穴？の下方を、C3予定地とした。もう少し高度を上げ、大きなプラトーが有るはずの方向にC3を作りたかったが、天候が悪く、仕方がない。何時もながら太田さんの地図読みが威力を発揮する。　（A）

10月10日、夜半の雨後は晴時々曇りの一日。

今日はC2への荷上げ任務で、田村と佐藤隊員が9時20分に先発し、森山隊員と樋上は10分遅れでC1を出発する。どうも森山隊員は体調が今一つ良く無いのかC1から見えている一番奥の尾根に登り着いた所に荷物をデポしてC1へ引き返す。12時の交信を済ませ、デポ地点には13時少し前に登り着く。そこから雪山装備を身につけ、15時50分にC2に到着。樋上にとっては初めてのC2である。B隊用のテントを一幕張り、16時の交信を終えてすぐに下山とする。　（B）

10月11日、晴たり曇ったり。

6時半に起きて外に出れば夜中の降雪で3センチ程の積雪。今日もC2への荷上げがB隊の任務。デポ地には12時半に到着し、13時からフィックス

▼C2上のメガネ岩を行く（後方はタワー）

帯を登り始める。ところが今日も森山隊員はクレバス帯を渡る所で荷物を置いてC1へ引き返す。どうしたのかと心配で、その旨を隊長に交信時に伝える。C2には16時に到着。荷物をデポして下山とするが田村と佐藤両隊員のスピードが早くて着いて行けない。18時半にC1に帰着するとアラーと煙草が届いていて、夕食時に3日ぶりにアルコールを胃に流し込む。就寝は21時だった。　（B）

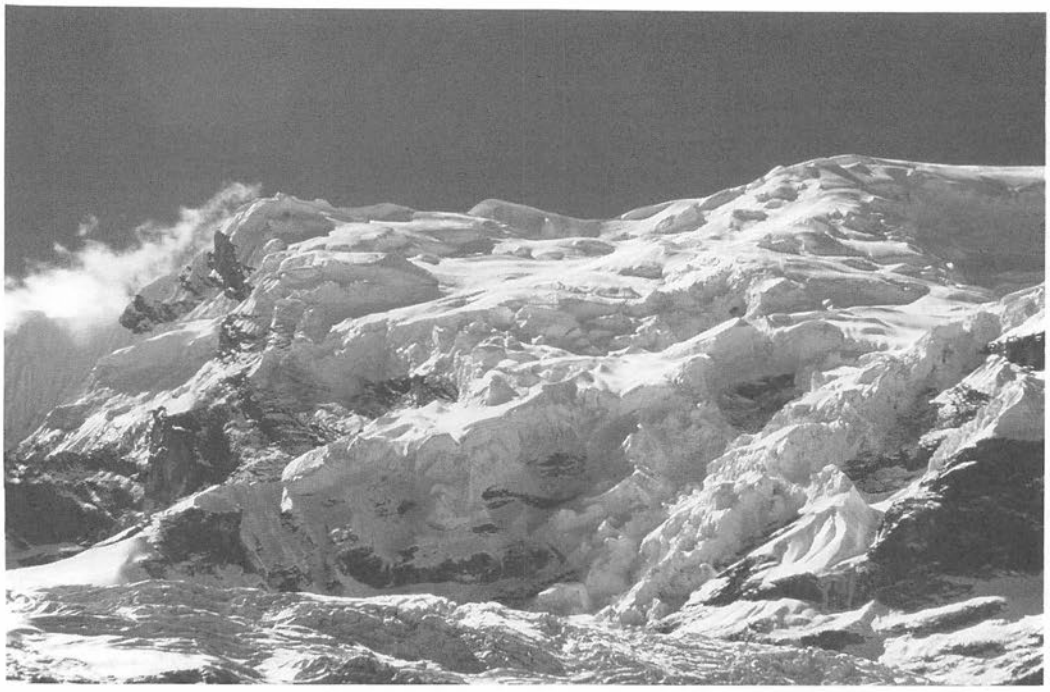
10月12日、晴～曇り～晴れたり曇ったり。

今日も食糧やフィックスロープなどのC2への荷上げを9時20分から開始する。A隊のメンバーにもとアラーを少し持って出る。デポ地には12時に到着し、毎日苦しい荷上げだが、何度も登り返しを繰り返している内に次第に楽になって来るしスピードも少しづつ早くなる。特にデポ地手前の氷河舌端下のトラバースは次第に効率の良いルートになって一段と早まる。しかし雪面に入るとスピードが極端に鈍り、今日のC2到着は16時であった。森山隊員は今日もC2へ着く直前に荷物をデポして先にC1へ。A隊はC3への核心部を突破したとの事で、ルート工作は順調に進んでいる感じだ。18時半にC1帰着。　（B）

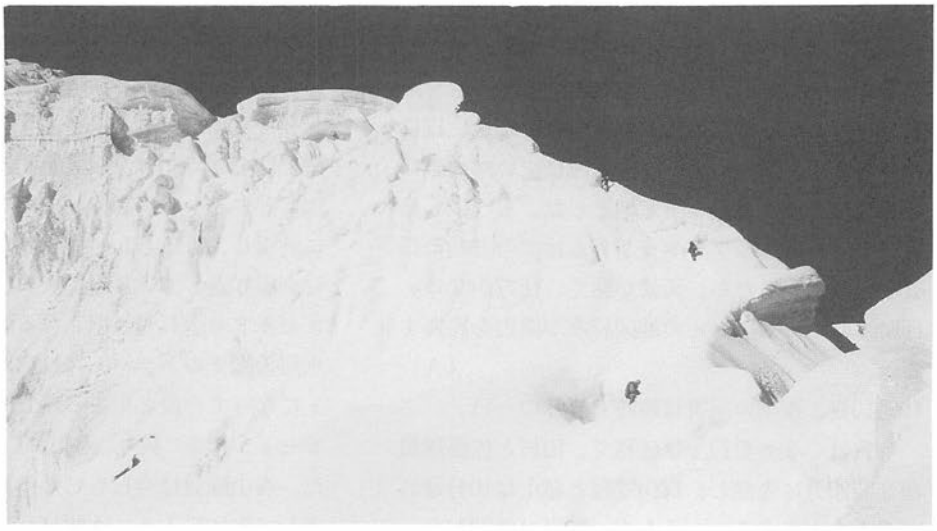
10月13日、晴～曇り後雪。

今日はC1からC2への最後の荷上げ日。明日から二日の休養日の後はいよいよB隊もC2への移動となる。C1からは軽い個装だけを持ち上がり、デポ地で残置の共装を詰め足してC2へ荷上げする段取りである。

デポ地には11時半に到着し、12時の交信を終えてからフィックス帯の登りに掛かる。相変わらず苦しい登りで14時の交信も思うに任せない。漸く



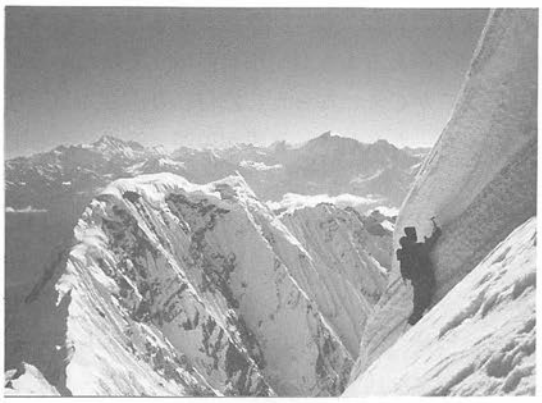
◀C2上から核心部（左下）と上部ルートを見る



▶C2上くびれの核心部を登る

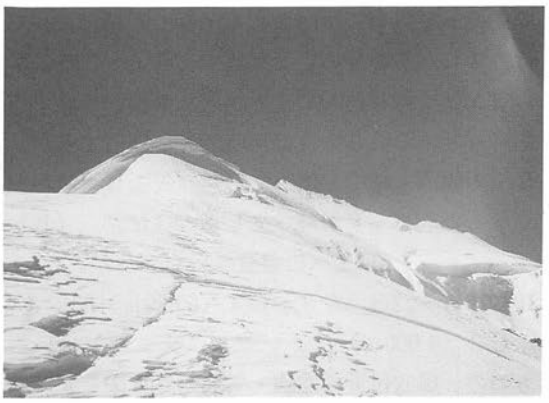
◀メガネ岩の上を行く

▲C２上の核心部を抜け雪崩の谷を行く



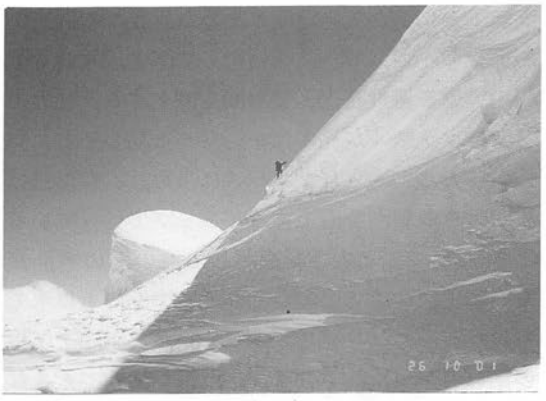
◀プヨンと左奥にシシャパンマ

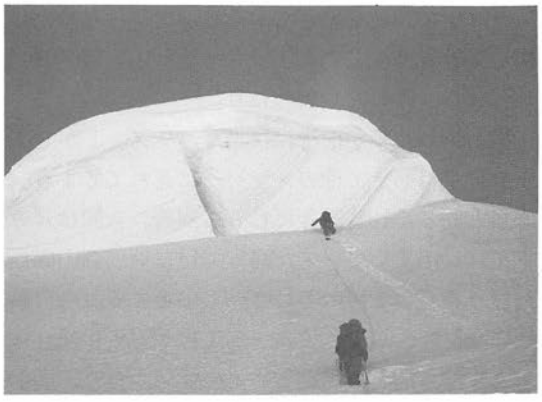
▼最高到達点（正面）と頂上（中奥）を見る



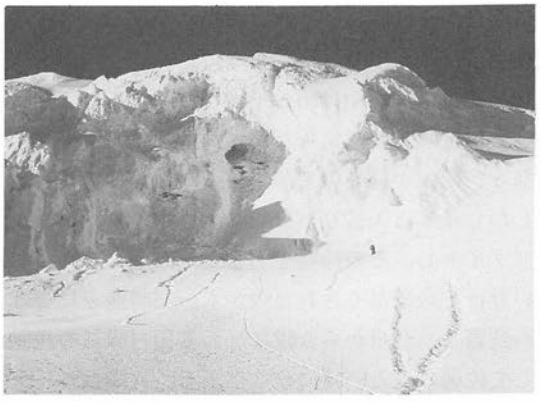
◀C4と左後方にチャマール

▼C４から左へ回り込んで東稜へ出る

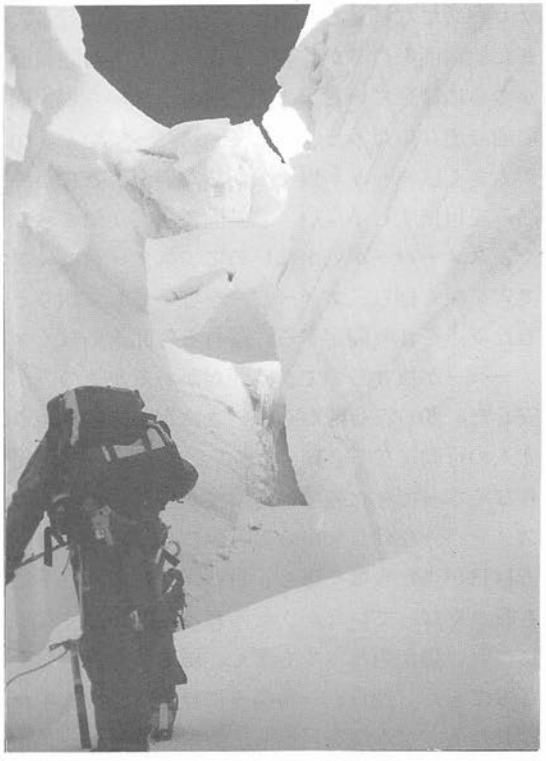




◀C4下の雪壁を登る



◀C3上のクレバス帯を行く



▲稜線直下の氷の回廊は突破出来ず

16時少し前にＣ２に到着し、森山隊員の登り着くのを待って急いで下山とする（森山隊員にとっては、これが初めてのＣ２到達である）。この頃から雲が低く垂れ込んで視界が悪くなり、やがて雪が降り始める。Ｃ１には18時50分に帰着するが、Ｃ１の周囲も積雪し始めていた。矢張り天気が悪くなるとスピードが鈍ってしまう様だ。　（Ｂ）

頂上への雪壁を行く

10月19日～22日　Ｃ３～Ｃ４（6,860m）間

Ｃ３（6,000m）はクレバスに挟まれてはいるものの、風穴付近の崩壊・雪崩からは少しずれ結果的には安全な所だ。左に風穴を見ながら大きなプラトーに上がる。雪崩れそうな大きな斜面を、斜面上の小さなピークを目指して直上、垂直な尾根の雪壁を避け左上、急斜面を直上する。初めてここでマナスルが見えたが、なんと易しそうに見えたことか。大きなクレバスに当たり、左に逃げ、また大きな斜面を直上する。トップで行っているとき、「ボン」と大きな音がして目の前の雪面が左右に亀裂が走り、覗いてみると雪面の下は氷で、やはり左右にクレバスが走っていた。斜面を尾根の割れ目を目指して登るが、尾根が切れて大きなクレバスになったところだ。その中を左に行き、また急斜面を登るが、登ると広い、大きな急斜面がさらに続いている。すぐ左側は上部からの雪崩の通り道なのだろう、掘れて溝になっている。山が大きく、ルートが良く分からないが、とにかく高みを目指すしかない。急斜面で、雪が締まらなく、スノーバーが効かないので、スノースコップで穴を深く掘り、スノーバーを埋めてしっかりとした支点を作り固定する。落ちると間違いなくスノーバーが抜けるので、時間がかかるがその方が安心だ。20日、Ｂ隊から田村さんがＡ隊にあがり、４人の行動になる。Fixロープ、スノーバーが足りなくなってきたので、危険度が少ないところのスノーバーを外しながらの行動になる。今まで朝方は日が当たらなく寒く、日が当たるにつけ手足も暖かくなっていたが、だんだん高度が高くなるにつれ、陽が当たっても寒く、風も強く、厳しくなってきた。22日、一番高みに見える、真ん中が割れた大きな氷塊を目指し、急斜面を登り、アイススクリュウーを３本打ち固定、14Ｐ続いた急斜面もこれで安心。右に回り込むとまたクレバス、氷の回廊のある大きな尾根が前に立ちはだかるが、結局ここがＣ４になった。23日、登山期間が残り少なくなったなかで、Ｂ隊が停滞、途中はずしてもらったFixもＣ３に上がらなくなった。24日、Ｃ３のテント一張りを撤収、Ｂ隊のサポートがないので、共同装備を分け合い個人装備も持つと結構な重さになる。晴れてはいるのだが、上部に上がるにつけ、風が非常に強く、また寒さも厳しく、結構シビアな状態でＣ４予定地に到着、テントを張り終えるとそのまま転がり込み、すぐ暖をとった。大田さんのオーバーシューズは正解だった。

（Ａ）

10月17日、朝方は晴。午後は崩れ雪が降る。

Ｃ３への初の荷上げに出発。荷物が重く苦しい登りが続く。それに結構厳しい所も多いルートだ。しかしフィックスロープをベタ張りして呉れているので助かる。それでも結局最後には昨日同様一人遅れてしまい、漸く16時過ぎにＣ３に登り着き、太田隊員から熱い飲み物で迎えられる。森山隊員は体調が回復した様で元気なのが嬉しい。

ラストで18時を過ぎてからＣ２に戻った時には雪が頻りと降っていた。　（Ｂ）

10月18日、晴れたり曇ったり。

少し慣れた精か前半は快調なペース。しかし矢張り後半はバテて他のメンバーに遅れてしまう。昨日と同じく16時過ぎにＣ３に到着。Ａ隊はルート工作に出ていて、未だ帰っていない。森山隊員の登り着くのを待ってＣ２へ下山とする。今日最後の交信で、Ｃ４へのルート工作が思うに任せないＡ隊から助っ人が欲しいとの要請が有り、樋上や本人の意向と承諾を確認した隊長から田村隊員に明日からＡ隊に加われとの指示が出る。今後の荷上げは３人でせねばならない。

10月19日、午前中は晴～午後から崩れる。

三日連続で疲れ気味だが、荷上げ物資も少なくなり、荷物が軽いので前半は楽勝気分での登行。しかし後半は矢張りバテ気味。途中で森山隊員がリタイヤし、その荷物を引き受けたので一層苦しい登行を余儀なくされたのかも。16時過ぎにＣ３へ到着し、今日からＡ隊に加わる田村隊員を激励して佐藤隊員と一緒にＣ２へ下る。Ａ隊はルート

工作に出ていて留守である。　　（B）

国境稜線（東稜）へ

10月25日～29日　Ｃ４～最高到達点（6,900m）

Ｃ４（6,680m）は風の通り道なのだろう。16時前後から決まって風が非常に強くなり、一晩中吹いている。マキシムでないテントが欲しいところだ。当初Ｃ４からの稜線が２kmと長いので、ビバーク覚悟のアタックも考えていたが、隊長から「Ｃ２での休養がないのでアタック中止。国境稜線の行動なら良いという」指示。隊として最低限の努力、出来るだけ高度を稼ぎ、稜線からの頂上の写真を撮り今後の参考にということでの、これからのＣ４からの行動となる。また、行動食もなくなり、僅かに残った飴を舐めながらの行動だ。25日、目の前の尾根に上がりたいのだが、右側からはクレバスがあるので上がれず、最初、大きな氷の回路を行くが、奥行きが結構あるが結局行き止まりになっている。氷の青さが幻想的だ。今度は尾根に沿って左側を行き、回り込んでプヨンを背にして、急斜面を直上、２ＰをFixする。これでアンザイレン用のロープを除き、Fixを外したロープも、もうなくなった。ナイフリッジとなった稜線の先にあるプヨンの頂上は、もう下に見えるようになった。広く緩やかな稜線が目の前に広がる。左側のすぐ真下の谷はチリメ・コーラ、それに続くサンジン氷河、ガネッシュ２峰（7,052m）の北面が見えるが、我々の目指すヤンラの頂上は長い稜線に隠れて見えない。張ったFixを１Ｐ外しに戻り、ヒドンクレバスを警戒してコンテで、稜線を進み写真撮影をする。珍しく風もなく、天気が良くて暖かい。26日、晴れ、登山最終日。さらに一段高くなった稜線に上がろうと、１ＰをFix、ここから稜線沿いにトラバースし稜上に上がるにはもう数ピッチかかるが、我々には、もうFixロープ、スノーバーが残っていない。被っているところを直に上がろうと、いろいろ試みたが雪が崩れやすく、勇気が出ない。登山最終日の最後に無理をすることもないので、ここを最高到達点で下降することになる。最高到達高度6,900m。7,000mを越えて稜線上から頂上の写真を撮りたかったが、叶わず残念だ。が、小生の場合、未踏の山を十分に堪能でき、右往左往しながらも、結果的には一番安全なルート作成が出来、事故もなく何よりだと思う。27日、Ｃ４を撤収して下山にかかるが、Ｃ２下の氷河も随分と様相を変えていた。Ｂ隊が荷上げに苦労したのが頷ける。天気が良く風もない中、下山のスピードは早く、Ｃ１まで下りることが出来た。先月29日にＣ２に上がって以来、久しぶりにＣ１に下山だ。やはり土の感触は良い。　　（A）

▼風穴下のＣ３

10月20日、晴れ。

今日は休養日になっていたので目を覚ましてはいたが、昨晩頼んでいた通りに８時の交信は森山隊員にして貰う。ところがA隊からフィックスロープが足りないので何とかして欲しいとの要請が有り、事態が一転する。これを受けた隊長からＢ隊に対して大幅なタクティクス変更の指示が下されたのだ。今日のＢ隊の休養は取り止めとし、これからテンジンに標識用の竹を切らせてガスカートリッジやスコップの柄などA隊から求められた物資をＣ１まで持ち上がらせるので、これを引き取りに降りると同時に、その間の不要と思えるフィックスロープを何本か外して一緒にＣ２まで持ち帰り、これを明日にはＣ３へ荷上げせよとの事である。急いで食事の支度に掛かり、佐藤隊員にも、その旨を伝える。

Ｃ１への下山は10時過ぎから。その前の交信で隊長に赤布も持ち上げて貰う様に依頼する。Ｃ１へ下り着いたのは思ったよりも手間どった為に14時になる。既にテンジンは荷物を担ぎ上げて我々の到着を待ち兼ねていたが、これから荷物を担いで引き返し、途中でフィックスロープを回収して行かなければならないとなるとＣ２へ帰り着ける

のは何時になるか分からないし、悪くすれば途中で帰れぬ事態になる恐れも有る。それですぐの隊長との交信で、今日のＣ１ステイを申し出て、Ｃ２への登り返しは明日の事にして貰う。朝一番から決まっていれば何とか出来たろうにと思えど、それは後の祭りでしか無い。テンジンから煙草を一箱頂戴出来たのは有り難い。しかし流石にシュラフ無しでは時間と共に寒さが募り眠れる様な状態ではない。23時になって度々は面倒だとばかり３人揃って用足しを済ますが、その後も殆ど眠れず、朝が訪れる間に二度もコンロを焚いて暖を取る状態が続いた。

10月21日、快晴～雪が降り大荒れとなる。

６時に起床するも睡眠不足の精か頭はすっきりしない。ラーメンでの朝食を済ませ、８時からＣ２への登り返しを開始する。寝不足の割りには快調で、デポ地には11時過ぎにトップで到着し、フィックス帯の第一ピッチ目を12時に終了と、ここまでは順調。しかしこの後、フィックスロープを回収し始めた頃から天気が崩れ始めたのに加えて凍りついたスノーバーのスノーバーが中々抜けて呉れなかったり、この日もクレバスの通過に時間を大幅に取られたりでＣ２へ帰り着いた時には18時を少し廻っていた。結局、この日回収したのはフィックスロープ３本とスノーバー２本、それにスクリュウハーケン一本であった。Ｃ２へ戻った頃から雪が激しく降り出し、天気は今回初めての大荒れ状態になる。　（Ｂ）

10月22日、快晴～曇り～小雪。

６時45分の起床。朝食中の８時の隊長との交信で、今後のタクティクスが又も大幅に変更される。残りの登山期間を考えての変更で、大まかにはＢ隊の荷上げは明日に延ばして今日は休養。Ａ隊は今日もＣ４へのルート工作を続けるが、今日の到達地点をファイナルとし、アタック要員を三人に絞ると言う内容である。樋上にはタクティクスの変更による今後の食糧配分を立案せよとの指示が出たので無い知恵を捻る。

14時頃から天気が崩れ始め、雪と霧の世界へと変わる。18時の交信でＡ隊からＢ隊の荷上げが有れば明日はＣ２へ下り、明後日には登頂を目指してアタック体勢に入りたいとの希望が伝えられる。　（Ｂ）

10月23日、雪の後次第に回復し、午後は晴。

６時半の起床。朝食後、８時の交信となるが、Ｃ２へ下る予定のＡ隊はのんびりしてか無線には応答が無い。８時半になって無線が繋がり、15分後に天候や周辺の状態を確認してからお互いの今日の行動を話し合う事になる。その15分後の交信で樋上としてはＣ３への荷上げに不安が有る旨を伝える。それは天候の悪い事だけを心配しての事だけで無く、Ａ隊が斜面にセットしたフィックスロープを流されて再度張り直す羽目になったと言う雪崩を一番心配したからである。隊長から返事の出せるタイムリミットはと尋ねられ、10時までにと言う事で了解が得られる。しかしそれは荷上げをする場合に出発する限々の時間で、それから荷上げの準備をしていては荷物を担いでのＣ３への移動はこれまでの我々のスピードと雪に埋まったフィックスザイルを掘り起こしながらの登行では不可能に近い。そう思って全体の意見を纏めようと努めたが到頭最後まで一つにはならず、最終的には反対意見を押し切って荷上げを中止すると決定、その旨を10時に隊長とＡ隊に伝える。悪者になっても良いとの副隊長としての苦渋の選択で決断には悔いは無いが、これで自分のヒマラヤ登山も終わりかとの思いが脳裏を走る。　（Ｂ）

10月24日、晴。

食事を済ませてＣ３へ荷下ろしに行く為の身仕度をする。思っていたよりも積雪多く、最初からラッセルと雪に埋まったフィックスロープの掘り出しに時間が掛かり、空身なのにペースは全くのスローモー。途中のＡ隊がセットしたフィックスが雪崩で流された為に張り直した斜面の横断地点に差し掛かった時にはＡ隊からの連絡通りにフィックスが撤収され、その後の急登部分のものも同様に撤収されている様に見えたし、時間も随分遅れていたので時間切れが気になり、森山隊員と思案していると最後に登って来た佐藤隊員がさっさと登って行くので、その後をついて行く形となる。幸いにもフィックスの撤収は、この斜面の横断部分とＣ３少し手前の何でも無い所だけで、急登部分には残置して有ったので助かり、Ｃ３には何とか16時過ぎに到着。先に着いていた佐藤隊員は既

にＡ隊が纏めていた荷下ろし物資を適当にザックに詰め、一足先にＣ２へ戻ると言うので、下って行くのを見届けてから最後に登り着いた森山隊員とテントの撤収作業に掛かる。ところが固定用の張り紐の先は雪面が凍て付いていてピッケルで一本掘り起こすのに10分も取られ、これでは全部終えるには１時間以上掛かってしまうとナイフで切断せざるを得なかった。それやこれやで漸く荷下ろし物資をザックに詰め終え、Ｃ３を後にしたのは17時前。既に陽は山陰に隠れ、夕暮までには未だ時間が有ると言うのに日陰では急激に気温が下がり、ジッとしていると寒さが肌身にこたえる。Ｃ２には19時に帰着。　　（B）

10月25日、晴。

６時の起床。朝食を済ませてＣ１荷下ろしの準備。今日は個装をメインにし、それに共装を出来るだけ加えた荷下ろしとする。８時にＣ２を出発するが、すっかり雪の下に埋まったフィックスロープの掘り出しに手間取り、最初の数ピッチだけで１時間以上掛かる。更にクレバスの通過にも難儀し、下りなのに時間を随分取られる。雪面が終わってフィックスが無くなった途中のデポ地で残置するアイゼンやハーネスの代わりに置いて有る個装を少し加え、Ｃ１には18時に下り着く。　（B）

10月26日、晴れたり曇ったり。

昨日下って来る時にフィックスロープは有る程度掘り起こしてはいたものの一部は再び雪に覆われていて時間を取られる。更にクレバスを渡る地点では割れ目が一層開いて元のルートでは渡る事が出来ず、新しくルートを作るのに時間が随分と掛かってしまい、Ｃ２に着いたのは17時。しかも荷物が多過ぎてゴミ類が収納出来ず、これは明日下って来るＡ隊にお願いする事にする。17時半にＣ２を出発するが、矢張りクレバスを渡る地点で難渋してしまう。Ｃ１近くになって霧に包まれてしまいルートを間違うミスを犯し、ここでも時間を取られたりしたが、何とか無事にＣ１帰着。既にすっかり辺りの暗くなった20時半だった。（B）

10月28日、概ね晴の一日。

30日に民工に荷下げして貰う隊荷の梱包作業。程々に片付いたのを見計らい、後は装備担当の森山隊員に御願いし、ＢＣへの下山を11時40分に開始する。森山隊員は明日か明後日、太田、萬徳両隊員は30日までＣ１ステイと言う事だし、今日下る予定の佐藤登攀隊長と田村、佐藤両隊員の３人もＣ１とは尾根を挟んで上流側の支流を偵察がてら下って帰ると言う事なので一人での下山である。

ＢＣには13時10分に帰着。隊長から差し出された飲み物を口にしたらウィスキーの湯割り。おまけに煙草まで頂戴して感謝の限り。簡単な下山報告の後での昼食事にもウィスキーを少々。18時過ぎに上流の支流を下って来た登攀隊長ら３名が帰着。思ったよりも時間が掛かったとの事である。彼らが装備を解くのを待ってメステントで夕食を兼ねた酒宴。久し振りに酔ったらしく、翌朝は些か頭痛がした。　　（B）

10月30日、晴の良い天気だが終日肌寒い。

８時の起床。程なく女性一人を含む十人の民工がやって来る。その割りには呑気なもので彼らはメステントの横で食事を済ませてから９時前になってＣ１へと荷下ろしに向かう。13時を前後して民工が下り帰り、太田、萬徳両隊員も間もなく帰着。久し振りに隊長を含めた全員が顔を揃える。昼食は焚火を囲み、全員の無事の帰還を祝して先ずは缶ビールでの乾杯。この食事会は15時過ぎに一旦御開きとなるが、16時過ぎから今度はラバとテンジンも加わっての夕食会が始まる。赤飯と酒井会長差し入れの鰻の蒲焼と嬉しい御馳走にアラーとチャンノアルコールが有るとなれば座の盛り上がらぬ筈は無い。丁度今回の登山の反省会の様な山談議となって時間の過ぎるのも気付かずにいたら、眠りに就いたのは２時だった。　　（B）

後列左から萬徳、佐藤邦、森山、佐藤英、田村。
前列左から太田、山森、樋上（ＢＣにて）

トピックス

第10回「中国登山研究会」

ＨＡＪ主催の恒例の「中国登山研究会」が下記のとおり開催される。

記

1.日時：2002年２月３日　午前９時～午後４時半
2.場所：豊島区民センター（東京、東池袋）
3.費用：3,000円（資料代含む）
4.定員：50名
5.申し込み：ＨＡＪ事務局（定員になり次第締切）
6.内容：登山報告〔ニンチン・カンサ(ＨＡＪ)、ヤンラ・カンリ(ＨＡＪ)、クーラ・カンリ（東海大学)、中国登山手続きの概要、中国の山々（スライド)〕

尚、当日会場にて中国地図（チョモランマ、チョゴリ、シシャパンマ、ムスターグ・アタ、中国山峰図、青蔵高原図等）の販売をします。又、「中国登山の手引き」も販売します。

ＨＡＪ華甲望年会開れる

12月８日（土）夕刻６時からＨＡＪ主催による「華甲望年会」が原宿の岸体育館内ランドマークに約60名が出席して開催された。

酒井國光会長の挨拶の後、労山副理事長斎藤義孝氏のご挨拶をいただき、本年「還暦」を迎えられた国重光熙（７月・神奈川)・荘司昭夫（８月・秋田)、八木原博子（９月・群馬)、井上功（12月・神奈川）各氏にＨＡＪ会員の高峰登頂者である飛田和夫（埼玉)、小野寺斉（東京)、名塚秀二（群馬)、今村裕隆（山口）からチベットのカム地方の男性が頭髪に巻く赤い飾が贈られた。次いで小林裕美子（神奈川)、土居玉枝（埼玉)、長谷川昌美（東京）の女性陣から男性陣へ、宮川真一（神奈川）から八木原さんへそれぞれお祝いの10数年は枯れない花が贈呈され望年会に入った。

19時すぎから2001年ＨＡＪがチベットへ派遣した登山隊の報告が行われ、ニンチン・カンサ隊は野沢井歩常務理事、ヤンラ・カンリ隊は札幌から駆けつけた佐藤英樹登攀隊長によって行われ、八木原圀明常務理事の中締めでお開きとなった。

Ｂｏｏｋｓ

アルピニストの50年

1959年ロールワリン・ヒマール登山を皮切りにガウリサンカール、ナンガ・パルバット、ギャチュン・カン、ニンチンカンサ等、ヒマラヤ地域に幾多の登山隊を派遣した福岡大学山岳部の創部50周年記念誌。勿論ヒマラヤ以前に国内での山行があり、それらがコンパクにまとめられている。

Ｂ５判　105頁　2001年11月刊
（連絡先）福岡市早良区飯倉３－22－５

ヒマラヤから

ローツェ便り

ナマステ!!

秋も深まってきましたが、いかがおすごしでしょうか。こちらは冬期ローツェ南壁の世界初登攀を目指して、カトマンズを出発するばかりとなりました。長年準備してまいりましたが、その間御声援御協力ありがとうございました。この９月10月は高所順応のためチョー・オユー峰に登り訓練してきました。名塚隊員が凍傷のため参加できなくなったのは残念ですが、残る７名の隊員でベストを尽くしたいと思います。

11月８日　冬期ローツェ南壁登山隊　　田辺治

東京集会のお知らせ

日　時　１月28日（月）午後７時～
内　容　新年会
場　所　ＨＡＪルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車４番出口から地上に出て右へ徒歩２分）又は、ＪＲ大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面２つ目の東池袋４丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩２分）

2002年ＨＡＪ登山隊隊員募集

八千メートル峰 シシャパンマに新ルートを求めて

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ（夢）を追い求めて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

1990年代に入り日本隊では、90年チョゴリ北西壁下部（横浜）、95年マカルー東稜下部（ＪＡＣ）、97年Ｋ２西壁上部（ＪＡＣ東海）など部分的な開拓が行われ、94年山野井泰史が単独でチョー・オユー南西壁に新ルートを開拓した。

現在シシャパンマ峰は、主峰の標高を8,027ｍとした場合、中央峰の標高が8,008ｍとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央部に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年ＨＡＪ隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂しないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだろうと推測される。しかし、中央峰を登った岳人たちもそこが「8,000ｍ」の標高を与えられているからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。中央峰の標高が8,000ｍを切ることも有りえない訳ではないだろう。

シシャパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的な困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えています。意欲ある岳人の参加を期待します。　（最終案内です）

記

1．時期　2002年９月10日～11月８日（60日間）
2．募集人員　10名程度
3．負担金　100万円
4．申し込み、問い合わせ　ＨＡＪ事務局

東京新聞の山岳書　東京新聞出版局　〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL:(03)3740-2674(直)

山小屋の主人の炉端話
著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人一話の取って置きのお話。
工藤隆雄 著　1500円

すぐ役立つ　山の花学
【飛騨高山の花博士】として知られる著者の、山の花見術入門書。
小野木三郎 著　1456円

すぐ役立つ　山の気象と救急法
山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。
飯田睦治郎　桜井博幸 著　1359円

すぐ役立つ　記念日の山に登ろう
人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はどこに。
石井光造 著　1300円

山の百名水
山岳写真歴30年、北海道 利尻から尾久島まで、山の百名水を取材。
山下喜一郎 著　1553円

北アルプス　やまびと物語
「岳人」に3年余り連載した「山人探訪：男達の賦」に加筆、登山をより楽しむための一冊。
柳原修一 著　1456円

北アルプス　山小屋物語
歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。
柳原修一 著　1456円

花と歴史の50山
「花と歴史の山旅」の第2弾、花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。
田中澄江 著　1359円

改訂増補　六十歳からの日本三百名山
60歳から13年間で三百座を踏破したスーパーお爺さんの山行記。
田中三郎 著　1456円

新・山靴の音
還暦をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。
芳野満彦 著　1262円

中高年登山　なんでも百科
「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しめるよう、中高年登山の虎の巻。
福島正明 著　1500円

さわやかに山へ
世界的な女性登山家が、初心者とアルプス、ヒマラヤを歩き、山を楽しみ安全に下りてくるこつを伝授する。
田部井淳子 著　1500円

登山の運動生理学百科
「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。
山本正嘉 著　2000円

山書散策
今まで数多く発刊された山書、何を読んだらよいか。そんな時の指針として―「岳人」連載時から好評。
河村正之 著　1500円

※東京新聞の販売店でも取り次ぎいたします。※本体価格に消費税が加算されます。

■ 寸 感 ■

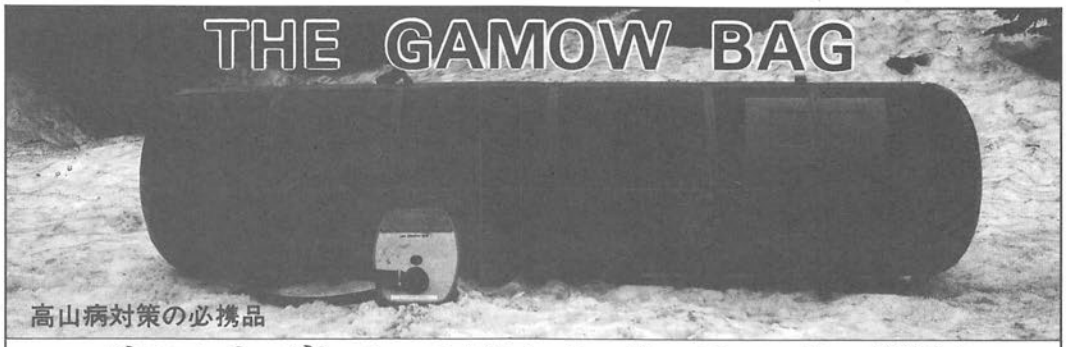
ヤンラ・カンリから帰国すると、ダウラギリ、マナスルの悲報と共に「ピサン・ピーク6,091ｍ」遭難の新聞記事のスクラップがあった。遭難された方の名前は新聞社では確認がとれなかったらしくカタカナになっていた。８人の隊員がいながら名前が確認できないような事実が「ヒマラヤ登山」では起きているのだ。その後、地方新聞社の関係者から「高山病」について照会があって氏名を確認することが出来た。登山の世界では誰かが情報を整理する必要があるのではないだろうか。(山)

事務局日誌（12月）

1日（土）　滝田収追悼会（於郡山、山森、松舘、天城）
2日（日）　滝田収告別式（於郡山、山森、松舘、中川、天城）
7日（金）　ヤンラ・カンリ隊打上げ（於伊豆）
8日（土）　ＨＡＪ華甲望年会（於、岸体育館内ランドマーク（59名）
9日（日）　群馬ミヤマ山岳会ダウラギリＩ峰追悼会（於新前橋、山森、中川、野沢井、寺沢、橋本）
11日（火）　中国登山協会から来日見合わせ連絡
14日（金）　労山望年会（於エミール、酒井、中川）
15日（土）　「日本人チベット行百年記念フォーラム（於渋谷、山森、松舘、寺沢、小島）
25日（火）　東京集会（16名）
27日（木）　仕事納め

ヒマラヤ No.363（２月号）

平成14年１月10日印刷　14年２月１日発行
発行人　山森欣一
編集人　山森欣一
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒170-0013　東京都豊島区東池袋４－２－７
萬栄ビル501号
電話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始！

加圧しただけで約２０００ｍ下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg)
●パルスオキシメーター
（血中酸素飽和度測定装置／重量380ｇ／単３乾電池４本使用／携帯型）

総代理店　：　日本メディコ株式会社
レンタル・販売問い合わせ先　：　株式会社 ティ・エッチ・アイ
〒135　東京都江東区木場２-５-７　ＫＨビル７階
ＴＥＬ：03-5245-0511　ＦＡＸ：03-5245-0510
（隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。）

TREASURE TOUR

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

――遠征隊、トレッキング、秘境への旅――
あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

マウンテントラベル株式会社 ☎03-3574-8880
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F
三井航空サービス代理店2452号

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア
株式会社 西遊旅行
国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員
西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp)

■本　社／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町２－３－１
岩波書店アネックス５F
☎03(3237)1391(代)　FAX 03(3237)1396

■大阪営業所／〒530-0026 大阪市北区神山町６－４　北川ビル５F
☎06(6367)1391(代)　FAX 06(6367)1966

お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル(通話料無料)をご利用下さい。
0120－811395

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP
ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町２-２-３ ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿１-16-７ ☎03-3346-0301
●神田登山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町１-６-１（タキイビル２F）☎03-3295-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町３-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町３-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町１-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町５-３ ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-４ ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-１ ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手３-４-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通２-５-１ ☎025-243-6330
●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南１-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡４-１-８ ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通１-４-５ ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通１-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西４-８ ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西３-５ ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条４-１-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条１-43-９ ☎011-883-4477
●外商部（メールオーダー係）／〒169-0073 東京都新宿区百人町２-２-３ ☎03-3200-7219

ICI石井スポーツ

事務所／〒169-0073 東京都新宿区百人町１-４-15 ☎03-3200-1004